

ISSN 0919-0180

2024 9 No. 49

豊田市
郷土資料館
だより

Vol.49

Toyota City Museum
Of
Local History

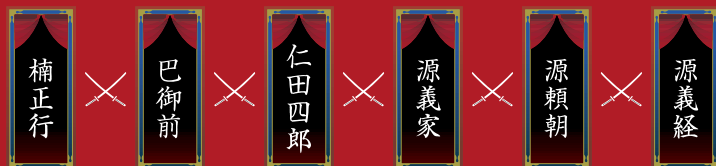
特別展 献馬大将

KEN BA TAI SHOU

とよたのお祭りと源氏の伝説

会期：11月3日(水祝)

～12月12日(日)



源 義経

目次

- ・特別展「献馬大将 —とよたのお祭りと源氏の伝説—」
準備レポート ————— 2・3
- ・鈴木正三没後350年記念事業 準備レポート
鈴木正三ゆかりの寺 普賢院(二井寺) ————— 4
- ・資料紹介
市域にのこる相撲資料～清見瀧門人の足跡～ ————— 5
- ・「ナカダシ」と百々貯水場 —矢作川の水制跡— ————— 6
- ・発掘調査速報 ————— 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース ————— 8

けんば 献馬のはじまり

愛知を代表するまつりのひとつに「献馬」あるいは「馬の塔」、「馬の頭」、「オマントウ」、「おまんこ」などといわれる馬のまつりがあります。(豊田地域では「献馬」といわれる場合が多いので、以下「献馬」といいます。)

馬への信仰は古くからあり、神聖な神様の乗り物として崇められてきました。鎌倉の頃に書かれた「吾妻鏡」には「若君甲冑初、献馬八田右エ門知家(中条家長の猶父)、引馬子息朝重」という記録があり、慶事や神事には馬を引くことは欠かせなかったようです。

豊田の献馬の歴史を見てみると、貞和元年(1141)、中条秀長の命により矢並の善阿というものが猿投神社神宮寺を再建しました。竣工にあたって願主善阿らが馬を引いたとあり、この頃の猿投神社では馬を引くことが儀式のひとつになっていたと考えられます。

献馬と棒の手、火縄銃

神事としての馬を引く儀式が、やがてまつりのなかに取り入れられ、農民のまつりとしての献馬がいつから始まったのかについては、記すものは見当たりません。記録によれば明応2年(1493)に宮口村が「合宿」として、猿投まつりに初めて参加したということから、15世紀後半には、現在の祭礼献馬の基本的な形式が定着していたといえます。

また、猿投まつりの棒の手の始まりについては次のような記録があります。

天文22年(1553)に尾張岩崎城主丹羽若狭守が、領民とともに猿投まつりに献馬を行ったのですが、翌年には農民に棒術を教え、馬の警護につけています。農民が武器を持って公然とまつりに参加するというのは、今では不思議に思えますが、猿投まつりの別名を警固まつりあるいはけんかまつりということからすれば、必然性があつてのことだったのかもしれません。

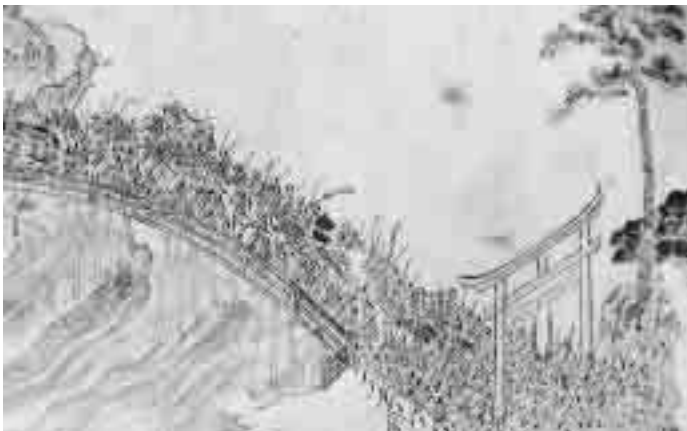
天正10年(1582)に秀吉の刀狩令が出され、農民が武器を持つことは禁じられました。ところが、献馬においては棒の手の禁止どころか、江戸時代初期には火縄銃まで加わり、警固まつりとしての様相はさらにエスカレートしていきました。



献馬大将 源義家



宮口まつりの献馬と棒の手 郷社六所神社図記 より



猿投神社祭礼絵図

鳥居脇に下馬の高札があります。これより先は人は馬に乗って入ることはできないので、境内の馬にのった人らしきものは、人ではなく人形であると考えられます。

とよたの献馬

当地では、11世紀から14世紀にかけて猿投まつりで行われていた献馬の形式が流行したようです。六所神社や知立神社、足助八幡宮、寺部八幡宮などでも合宿形式による献馬が行われるようになりました。さらに村の鎮守のおまつり、雨乞いや疫病除けの祈願成就のお礼としても、献馬が盛んになりました。

献馬では神の依り代となる出し物が鞍のうえに乗せられます。これを標具^{だし}といい、当初は御幣や笹、松などといったシンプルなものだったのですが、献馬の隆盛とともに、高札に^{はんげ}払子や^{ほす}柄杓^{ひしゃく}といった馬を手入れする道具や家紋、馬印をかたどったものなど、意匠を凝らしたさまざまな標具が競うように現れるようになりました。

駄覆^{だおい}や泥障^{あおり}、標具巻^{だし}きなど馬飾りに金欄の美しい瑞祥(竜や獅子、虎、鹿など)や源氏武者などが描かれるようになったのも同じ時期と思われます。

献馬大将と源氏の伝説

標具のなかには「でく」「おでく」「おでくさん」と呼ばれる等身大の人形があります。旧寺部中町の人形「仁田四郎忠常」の収納箱には「献馬大将」と記されており、献馬のなかでも特殊な位置付けであったともいえます。各合宿の間ではけんかとはならないまでも、小競り合いや長年の確執もあったことから、緊張した雰囲気なかで献馬が行われたと考えられます。そうしたなかでひときわ目立つ献馬大将は、相手方の格好の標的になったといい、これを証明するかのように、人形の額などには石つぶてのあとと思われる傷が痛々しく残っています。

献馬大将は愛知県内で11体確認されていますが、いずれも猿投神社や六所神社、足助八幡宮といった豊田市にかかわりのある神社の献馬に使われたもので、そ

のうちの11体が豊田市内にあります。

八幡太郎義家	旧藤沢村(豊田市藤沢町)
源義経	旧重田和村(豊田市穂積町)
源頼朝	旧西野村(豊田市穂積町)
仁田四郎忠常	旧寺部中町(豊田市寺部町)
巴御前	旧椿木村(豊田市豊松町)
楠正行	寺部新屋(豊田市高橋町)
曾我五郎	足助町野林
源頼政	足助町久木
梶田甚五郎	瀬戸市菱野
伝吉左	小原村三ツ久保

市内の献馬大将は楠正行を除き、源氏につながる武者たちです。こうした人形がつけられた背景を探てみると、市内各地に源氏にまつわる伝説が残されていることがわかります。

特別展「献馬大将」

第二次世界大戦後、社会構造が大きく変わり、おまつりの担い手である村や青年団といった組織も変革を余儀なくされました。また、馬の需要がなくなり、馬自体の調達が難しくなりました。

現在では献馬を行うところもわずかになってしまい、献馬が行われてきたことを知る人さえいなくなったところもあります。神社の蔵などから見つかる標具や馬飾りだけが地域に伝わってきたおまつりを物語ろうとしています。

本展では、市内の献馬大将11体を一堂に公開し、献馬の歴史やエピソード、献馬大将の生まれた背景のひとつとして考えられる源氏の伝説をあわせて紹介します。おまつりなどの民俗資料を通してアプローチするふるさとの歴史や文化のおもしろさに触れていただきたいと思います。

(蟹 一夫)

鈴木正三没後350年記念事業にむけて

平成17年6月は、江戸時代初期の仏教思想家・鈴木正三の没後350年を迎えます。生誕、活躍の地である豊田市、足助町におきまして鈴木正三没後350年記念事業実行委員会を去る5月に設立しました。特別展、シンポジウム、合唱組曲の発表・交流会など多彩な事業を計画しています。事業をととして正三の人、事績、思想を広く、わかりやすく紹介したいと思います。

正三ゆかりの寺 普賢院(二井寺)

普賢院は東加茂郡旭町大字押井字寺ノ入にあり、江戸時代中頃までは二井寺とよばれていました。天台宗の古刹で鈴木正三が再興し、旗本原田氏とともに梵鐘を寄進した正三ゆかりの寺です。普賢院の寺号は宝永年間(1704-11)の住職であった長海の私号である普賢が寺号に変わったといわれています。押井の大字名もおして押出村と二井寺村が明治11年に合村して付けられた字名で、もとは二井寺村とよばれていました。寛永の頃は押出村の二井寺分として分村となっていました。

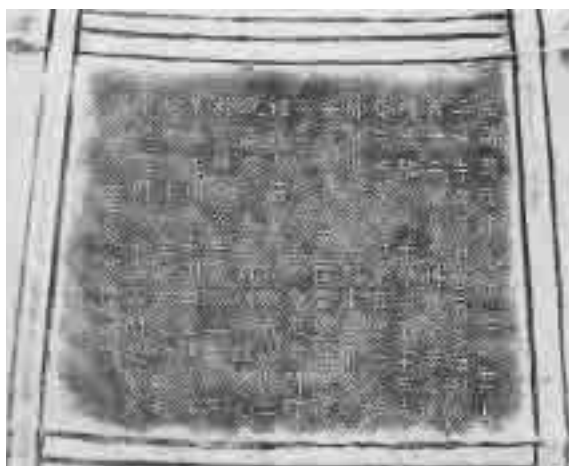


鈴木正三ゆかりの寺 普賢院(二井寺)

二井寺は標高1,400余の峰々が連なる山の頂上近くに位置し、寺伝では白鳳時代の創建とつたえられています。明治11年の愛知県地名集覧によれば、周辺に仁王堂、大蔵郷、三蔵屋敷、密蔵坊、西ノ坊、大仙坊、金剛坊、毘沙門坂など仏堂伽藍にちなむ小字がつたえられていることから、全山に諸堂が建ち並ぶ典型的な天台密教、山岳仏教の大寺院であったことがうかがえます。隆盛期には、僧房12舎を構えた仏教繁栄の一大道場であったといわれています。同寺に所蔵されている平安時代の瑞花鴛鴦八稜鏡の年代からも建立の古さが理解できます。戦国時代、武田氏の三河攻めで伽藍をことごとく焼かれ、廃寺となりました。

寛永10年(1633)11月、正三は往時の隆盛をしのび、その荒廃ぶりを嘆いて、押出村の松井次太夫とともに自ら願主となって、草堂一字を建て観音菩薩像を安置して再興をはたしました。寛永21年には旗本原田四郎佐衛門尉種直とともに梵鐘を寄進しました。

梵鐘は高さ1.5m、口径1.2mで頂部に高さ1.2mの竜頭がつき、中央に池ノ間と呼ばれる滑面があり、正三の撰文による銘が刻まれています。銘文は三州賀茂郡足助莊龍雲山二井寺…で始まる前文と鐘鑄の功德をたたえた偈文からなっています。銘尾に「于時寛永二十一年甲申曆仲春吉日、治工摂州大坂之住宗左衛門



梵鐘の銘文

尉藤原胤次、尾州熱田住小塚次兵衛銘切」とあり、大坂で鑄造され、尾張の熱田で銘が切られたことを示しています。大きさ、形状、紀年、鑄造者、刻銘者が豊田市山中町恩真寺蔵の梵鐘と合致し、両者は同時期に同じ挽型によって鑄造されたと考えられます。

前文に「且又士農与工商 励其業者 亦聞此声則出塵離垢」とあり、士農及び工商、その業に励めば、この声を聞き、塵を出、垢を離れると力強く説き、正三の万民の職業のあり方、倫理観を最もよく表し、銘の一字一字の切りあとから読み取ることができます。寛永10年から21年頃は島原の乱がおさまリ、弟重成が初代天草代官に任ぜられ復興に専念、自らも天草に赴き社寺の復興にあたり、思想的にも最も円熟した時期でした。二井寺の復興は市内矢並町の医王寺の復興、足助町の十王堂の建立とともに古寺再興という正三の偉業の一つにあげられます。本稿執筆にあたり普賢院住職小林全正師には種々ご教示いただきました。厚くお礼申し上げます。(松井 孝宗)

市域にのこる相撲資料～清見瀧門人の足跡～

猿投神社(豊田市猿投町)に奉納された額に大きく「大関叶」と書かれたものがあります。そこには「安政二年(1849)乙卯七月吉 江戸 清見瀧又市門人 当国東広瀬住人 伊呂波山小三郎 敬白」とあります。(伊呂波山は芳友町に顕彰碑がある。)



清見瀧又市は、江戸相撲の年寄の一人です。初代の清見瀧又蔵は三河国吉良の出身、江戸相撲の玉垣部屋に入門した力士です。明和年間末から天明4年(1814)11月まで現役力士で、引退して清見瀧部屋を起こしたといわれています。又市はその三代目です。江戸相撲の年寄は、地方巡業を行ったり門弟を拡大するために地方相撲を指導し、頭取を任命して興業の取り次ぎをさせるなどしています。清見瀧部屋は、初代の又蔵が三河出身であったこともあって、この地域とのつながりが強かったようで清見瀧門人の奉納額が、この他に猿投神社3点、志賀神社(豊田市岩倉町)1点あります。時代は最も古いもので安永2年(1801)、最も新しいもので明治27年(1894)のものです。三代目の又市が文久4年(1864)に亡くなっていますので、四代目・五代目の門人も含まれています。

額は、「大関叶」奉納額、「御免相撲」奉納額、「弓」奉納額です。額面には東広瀬村住人都崎新助、東広瀬村住人日出山政吉、当国之住若緑金馬、当國中垣内村糸柳益太郎、糸柳熊太郎、湊川徳太郎、高勇萬太郎、市の森政造、巴川丈太郎など、四股名と思われる名前が多くあり、この地方で活躍した地方相撲の力士ある

いは地方相撲の指導者・頭取の名前であると思われます。こうした頭取が江戸相撲とのパイプ役を務め、地方相撲を発展させてきたのでしょう。こうした地方相撲の頭取は地域の有力な顔役が多く、博徒と連携して活動する実力者もいました。

文久2年(1862)堤村町の秋葉山大権現に相撲四本柱を奉納し、祭礼相撲を許可した文書があります。三代目清見瀧又市が堤村町の若衆中と三河山惣兵衛宛に出した相撲の免許です。ここに見える三河山惣兵衛は、はじめ地方相撲の力士でしたが、後に頭取となり奉納相撲の興業などに手腕を発揮した地域の顔役です。



秋葉山大権現 免許
当社祭礼之節年々古来より相撲仕来り候処、四本柱無之依て此度拙者致奉納差免置候条実正相違無之、向後祭礼相撲之節其辺願取世話人之者立寄猥ケ間敷儀無之様急度相慎可申候、依て免状如件
一御公儀様御法度之儀は不及申惣て相撲作法堅相守可申候事
江戸相撲年寄
文久二年戊戌六月日 清見瀧又市(印)
三州碧海郡重原庄堤村町
若衆中様
三河山惣兵衛様

堤村町の秋葉大権現は、現在堤町宮畔の八幡社境内に移築されており、お堂が一つ残るのみで相撲四本柱は確認できません。しかし、こうした清見瀧門人関係資料は、市域に他にもみられ、この地方の相撲の興隆を物語る資料といえます。

(伊藤智子)

「ナカダシ」と百々貯木場

— 矢作川の水制跡 —

矢作川とその支流・岩本川の合流点から矢作川の上流へ向かって約1.5kmほど川辺を歩くと、川岸に築かれた石垣を見つけることができます(扶桑町1丁目地内)。下部の多くが砂に埋もれ、現在確認できる部分も草などに覆われていますが、石垣の高さは足元から約1.5mあります。上から見た平面形は、川岸を底辺とした直角三角形形状になっており、矢作川へ向かって角を突き出した形になっています。現在確認できる石垣の延長は、上流側が約1.5m・下流側が約1.5mを測ります。



上流側から見た石垣の様子(画面中央部分)

石の積み方は、ほとんどの部分が間知石^{けんちいし}の空積みですが、川に突き出た三角形の先端部分から、上流側・下流側それぞれ約1.5mの延長部分は人造石工法で作られています。人造石工法とは、伝統的な技法である「たたき」を改良して大規模な土木構造物の築造に利用した工法で、セメント工法が普及する以前の明治・大正期に用いられました。岩本川と矢作川に接して造られた百々貯木場もこの人造石工法によって造られています。百々貯木場の竣工が大正12年ですので、おそらくこの石垣も同時期に造られたと考えられます。

この石垣は、地元の扶桑町や百々町で「ナカダシ」と呼ばれる水制(流水の勢いの緩和や流路を調整するために川岸から川中へ向かって設ける工作物)と考えられます。現在の「ナカダシ」は、矢作川の水位からは高い位置にあり、増水時を除いて流れが当たることはありませんが、築造当時の水面は現在よりも高かったことから、水制の役目を十分果たしていたと考えら

れます。そして、貯木場と「ナカダシ」とともに矢作川に面して水流の勢いを受ける部分に人造石工法が採用されていることは、当時の工法を考える上で大変興味深い事例です。



人造石工法で造られた部分(先端部)

百々貯木場は、上流から流された材木を集積して材木に加工したり、再び筏に組んで下流へ送ったりする施設でした。貯木場に関連する図面の一つには「ナカダシ」が描かれ、「ナカダシ」付近から蛇籠^{じゃかご}・牛杣^{うしわく}で貯木場の水門付近へ流れを誘導するような仕掛けを設けている様子が描かれています。



百々貯木場図面(百善文書) の部分が「ナカダシ」

これらは、上流から流れてくる材木を効率よく貯木場へ集めるために設けられたと考えられることから、「ナカダシ」は百々貯木場と一体的に機能していたと言えます。なお、「ナカダシ」からさらに約1.5kmほど上流には、「オオダシ」と呼ばれる水制跡もあります(扶桑町1丁目地内)。これについてはまた稿を改めて紹介したいと思います。(天野博之)



掘調査速報



すえちゃん

高橋遺跡（高上町2丁目）

本遺跡は、昭和30年までに行われた1次調査を超える調査の結果、弥生時代中期末から平安時代の竪穴建物1棟・方形周溝墓1基などが見つかり、県内屈指の集落遺跡であることがわかっています。

今回は集合住宅建設に伴い、6月22・23日に基礎部分の緊急調査を実施し、竪穴建物1棟と柱穴1基を検出しました。竪穴建物は柱穴・周溝・火処が確認されず、かつ土器の出土が少なく小規模なため、住居以外の用途（例えば倉庫など）が想像されます。内部からは弥生時代終末期（約1,500年前）の土器が出土しました。



竪穴建物の様子

梅坪遺跡（東梅坪町5丁目）

本遺跡は、矢作川に面する最も低い段丘上に位置しています。これまでの調査を超える調査では、弥生時代中期末から平安時代の竪穴建物2棟などが見つかり、弥生時代後期（約1,500年前）に掘削された環濠を持つ集落であったことがわかっています。

今回の調査区は、名鉄三河線高架より南側の段丘下にあたります。1本のトレンチを川砂が厚く堆積する湧水点付近まで20m程度掘り下げ、拡張区とあわせて計30mを調査しました。調査区北西隅の地表下1.5mには、古墳時代前・中期の遺物包含層があり、その面に掘り込まれた残存幅2.5m・深さ1.5mの大溝1条が見つかりました。出土遺物から古代末期頃（約

1,500年前）の大溝と考えられます。その他のトレンチでは、遺構・遺物とも確認できませんでした。



拡張区における大溝の状況

堂外戸遺跡（市木町堂外戸）

本遺跡は小高い台地上に位置し、高橋遺跡の最北端から市木川を隔てて、北200mの距離にあります。西から南には、矢作川沿いの沖積低地（現在の水田地帯）を臨むことができます。市営住宅の建て替えに伴い、平成13年までに約1.5haを調査する予定ですが、今年度は7月末から約1.5haの調査を実施しています。

遺跡の遺存状況は良くありませんが、注目すべきは調査区を南北に縦断する大溝の存在です。溝は断面U字形で、残存幅2.5m・深さ1.5m。上面1.5mほどから古墳時代中期（約1,500年前）の土器がまとまって出土しています。今のところ溝下部には土器がほとんどなく掘削時期は不明ですが、規模・形状から推測すれば、弥生時代の堂外戸ムラを取り囲む環濠か、古墳時代の

豪族居館の周囲を巡る溝となる可能性が考えられます。環濠集落であれば市内では3例目、豪族居館になれば県内初の調査例となり、今後に期待がかかります。



大溝の調査状況

むしか
六鹿邸は、明治11年(1876)にこの地域の豪農の六鹿清七によって建てられた和風建築です。

六鹿清七は、弘化2年(1841)11月22日に美濃国羽栗郡円城寺村(岐阜県笠松町)で生まれました。明治維新後に材木商を営み、陸軍名古屋師団の御用商人を勤めていました。その後、1国の本は農業にある、との信念に燃え、当時は原野だった高岡の新馬場に移り住み、開墾に着手しました。枝下用水の開通を見通して水田を造成し、幾多の困難に耐え、明治17年(1884)頃、1町歩(1町10畝)の開墾に成功しました。晩年にはこの六鹿邸を築き、地主として地域の農業振興につくし、大正11年(1921)8月1日に数え70歳で亡くなりました。

六鹿邸は、紆余曲折を経て昭和22年11月1日に六鹿



文化財シリーズ



むしか
六鹿邸
(市指定文化財・建造物)

家から譲り受け高岡村の所有になりました。その後、高岡中学校の特別教室、1高岡和洋裁学園(昭和21年1月1日開校)、1高岡村立高等家政学校(昭和22年1月1日開校)など様々に活用されてきました。昭和22年11月1日には、明治期の建築を伝える建造物として豊田市有形

文化財に指定されました。

六鹿邸の母屋の大黒柱は樺材、柱は桐が使われており、土間からみることのできる梁や太い鴨居などは材木商に相応しい威風堂々たる様子をみせています。床の間に

は六鹿清七自筆の書がかけられています。

人々の熱意でこの地に残った六鹿邸は、現在も地域の集いの空間となっており、展示をつうじて高岡の歴史にもふれることができます。

資料館NEWS

夏休み子ども月間終了

7月1日(土) 8月1日(火)に、夏休み子ども月間を開催しました。本年度も様々な催しを行いましたのでその様子を紹介します。

★ スタンブラリー

火おこし器や黒曜石の使用体験、銅鐸の高さあてクイズ、名探偵になって展示資料を探しながらスタンブラリーを行いました。

★ ペーパークラフト

郷土資料館オリジナルキャラクター「すえちゃん」「どうたくん」のペーパークラフトを作成しました。完成後「どうたくん」は鉛筆立て、「すえちゃん」は小物入れになります。親子でチャレンジしていく方が多かったです。

★ 火おこし大会

8月毎週土曜日に行いました。火おこしチャンピオン最短記録は、第2回挑戦者、市川悠貴くんの2分3秒です。家族みんなで挑戦者の応援をしている姿がよくみうけられました。

★ 夏休み親子講座「まがたま作り」

古代の装飾品「まがたま」を作りました。まがたま作り講座は本年度で22回目になりましたが、毎年人気です。

★ 夏休み親子講座

「古代食を食べてみよう！」

複製のかめを使って「玄米」「もち米」「スープ」「貝」の料理を作りました。縄文時代・弥生時代の調理方法の一端にふれることができました。



古代食講座の様子

★ 親子史跡めぐり

市指定曽根遺跡、企画展「猿投山麓の遺跡」展、県指定池田1号墳、馬場瀬古墳群、現在発掘中の堂外戸遺跡に行きました。初めて史跡や発掘現場を見学した方も多く、大変喜んでいただきました。期間中は1,000名の来館者があり、大盛況に終わりました。

利用案内

開館時間 10:00 ~ 17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩10分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩10分

■豊田市郷土資料館だより No.49■

平成31年7月1日発行

編集 発行 豊田市郷土資料館

〒471-0001 豊田市陣中町1-1

☎(0565)25-1111 FAX(0565)25-1112

E-mail: info@city.toyota.lg.jp

HP: http://www.city.toyota.lg.jp

※豊田市郷土資料館だよりは11月でもご覧になれます。